

# 現代日本語の漢字の意味分類

## A Semantic Classification of Japanese Kanji

野 田 時 寛

### 要 旨

現代日本語の表記に使われる漢字を意味別に分類することを試みる。

その目的は、ある意味分野を表す類義・対義の漢字相互の関係を分析し、それらが形作る熟語を比較検討して、漢字の機能を分析することにある。

一つの言語形式の用法を記述するには、他の言語形式との関係を述べる必要がある。ある形式が持つ用法は、他の形式との緊張関係の中で決まるものだからである。漢字の機能を分析するには、部首別や五十音による配列よりも、意味分野別の配列が有効である。

検討する漢字の範囲は、とりあえず、常用漢字とする。その中で、類義の漢字がどのような語を作り、どのような語を作らないかを見ていく。

本稿は、漢字の意味分類表の提示を目的とするが、その前に、いくつかの例で漢字の用法、特に語構成要素としての用法を分析し、漢字の意味による分類の有効性を確認する。

### キーワード

常用漢字, 意味別分類, 類義字, 語構成, 日本語教育

## 1. はじめに

現代日本語の表記に使われる漢字を意味別に分類することを試みる。

その目的は、ある意味分野を表す類義・対義の漢字相互の関係を分析し、それらが形作る熟語を比較検討して、漢字の機能を分析することにある。最終的な目標は、漢字の用法の体系的な記述研究である。

筆者の観点は日本語教育にある。日本語の語彙・文法を習得しながら漢字を学習する学習者およびその教師の立場に立って、漢字の機能・体系を考えていこうとするものである。

## 2. 意味による分類ということ

一つの言語形式の用法を記述するには、他の言語形式との関係を述べる必要がある。ある形式が持つ用法は、他の形式との緊張関係の中で決まるものだからである。

語の場合の五十音順、あるいは漢字の場合の漢和辞典の部首別順という一般的な形で配列し、他への参照指示を細かく行うという方法もあるが、初めから意味用法の近い語・漢字が並ぶように分類すれば、参照・比較が容易になる。

日本語の単語の意味分類は、これまでもいくつか行われている。また、意味別に見出し語を排列した国語辞典も編集されている。

国立国語研究所編（1964）『分類語彙表』

（2004）『分類語彙表 増補改訂版』

池原悟他編（1997）『日本語語彙体系』岩波書店

山口翼（2003）『日本語大シソーラス—類語検索大辞典—』大修館

大野晋・浜西正人（1985）『類語国語辞典』角川書店

柴田武・山田進編（2002）『類語大辞典』講談社

また、類義語の使い分けを詳しく解説した類語辞典も出版されている。

小学館辞典編集部（1994）『類語例解辞典』小学館

語に関して、意味分類による類語辞典の価値は広く知られてきていると思われるが、字でも意味による分類の価値は大きい。また、字の場合は、単独での用法だけでなく、語構成要素としての用法の比較も大きな意義がある。別の言い方をすれば、その字の「造語力」の比較である。それも、類義の字をまとめておくことで、対照がしやすくなる。

しかし、語構成要素としての漢字の意味分類を行い、そこから類義の漢字、語の用法を検討した先行文献は、筆者の知る限りではまだ存在しないようである<sup>1)</sup>。

本稿では、現代日本語の表記に使われる漢字を意味別に分類することを試みる。検討する漢字の範囲は、とりあえず、常用漢字とする。その中で、類義の漢字がどのような語を作り、どのような語を作らないかを見ていく。

現行の常用漢字は2136字であるが、その中には「埼玉」の「埼」や「岐阜」の「阜」のような、他に熟語を形作らないものがある。これらは意味分類、造語力の検討の対象外となる。

本稿は、漢字の意味分類表の提示を目的とするが、その前に、いくつかの例で漢字の用法、特に語構成要素としての用法を分析し、漢字の意味による分類の有効性を確認する。

### 3. 漢字の用法——語と語構成要素——

日本語の漢字は、単独で語となるものと、他の漢字と組み合わせあって語を構成する要素、語構成要素となるものがある。

例えば、「ふね」を表す漢字には、

(1) 常用漢字として「ふね」という読みが認められているもの

船 舟

(2) 常用漢字としては「ふね」と読めないが、訓読みとして「ふね」が辞典で示されているもの<sup>2)</sup>

艇 舶 槽

(3) 「ふね」という読みで使われることはないが、「ふね」に関わる意味を持ち、「ふね」に関連する熟語に使われるもの

艦 戦艦 艦艇 艦長

以上の「船・舟・艇・舶・艦」は、ある一つの意味分野で使われるので、発音（音読み・訓読み）の違いにかかわらず、一つの場所にまとめられ、解説されることが望ましい。これらは、たまたま同じ「舟」の部首を持つため、漢和辞典・漢字辞典の類ではすぐ近くに集められている。しかし、共通の意味を持つ漢字のグループとして、それらがまとめて比較検討されることはない<sup>3)</sup>。

また、一般に類義の意味を持つ漢字が同じ部首を持つとは言えず、漢字辞典の中で全く別の位置に置かれているのがふつうである。

以下では、いくつかの類義漢字とその熟語を分析の例としてとりあげ、漢字の造語力とその中の問題を考えてみる。

### 3-1 「ふね」

上でとりあげた「ふね」を表す漢字の造語力について、もう少し見てみよう。

それぞれの元の意味用法は、おおよそ次のようにまとめられる。

舟 (手でこげるような) 小型のふね

船 より大きなふね

艦 戦争に使う武装した大きなふね

艇 小型のふね

舶 (海を航行する) 大型のふね

この五つの字の中でもっとも一般的で、造語力も大きいのは「船」である。「客船」「帆船」「飛行船」「船室」「船体」「船底」など。「艦」も多くの熟語があり、「戦艦」「母艦」などの軍事的なものを別としても、「船上」「船首」「船尾」に対応して「艦上」「艦首」「艦尾」などがある<sup>4)</sup>。

「舶」の特殊な用法として、「舶来」という語がある。

また、それぞれが組み合わさって熟語を形作る。

船舶 艦船 艦艇 舟艇

これらの違いは日本人にとっても難しい。

「船舶」は「ふね」一般を表すが、その中でも比較的大きいもの<sup>5)</sup>。

「ふね」という話し言葉に対する書き言葉でもある。

「艦艇」は各種の軍艦の総称。

「艦船」は、「軍艦と船舶。また、艦艇の総称。」(明鏡国語辞典)

「舟艇」は一般的な語ではないが、「小型の船」を意味し、「上陸用舟艇」という形で見ることがある。

以上のように、それぞれを別に記述するよりも、熟語も含めてまとめて記述したほうが、全体的な使い分けの見通しがわかりやすくなる。

### 3-2 「みる」

次に、「みる」ことに関する漢字をとりあげる。

上記の「ふね」の例と同様に、「みる」ことを表す漢字には、

(1) 常用漢字として「みる」という読みが認められているもの

見る 診る

- (2) 常用漢字としては「みる」と読めないが、一般には使われることがあり、国語辞典で「みる」の漢字表記として示されているもの  
視る 観る 看る

- (3) 「みる」という読みで使われることはないが、「みる」ことに関わる意味を持ち、「みる」ことに関連する熟語に使われるもの

監 監督 監視 監査 監禁

覧 観覧 閲覧 遊覧 回覧 総覧 高覧

鑑 鑑別 鑑賞 鑑識 鑑定

がある<sup>6)</sup>。

「診る」は診断に関し、「看る」は看護・世話などに関して使われることはわかりやすいが、「見る」「視る」「観る」の違いはわかりにくい。

『岩波国語辞典』（「見」の項）によれば、

「視之不見」（老子）を「これをみれどもみえず」と訓ずる例で分かる通り、「視」は意志を伴う行動に使い、受動的に（でも）目に入る（つまり、みえる）「見」と対比される。「観」は（「視」の場合より）いっそう念を入れてよくみる意に使う。

という違いがある。

それぞれが形作る熟語を並べてみると、

見 見物 見聞 見学 一見 外見 必見

視 視界 視覚 視線 視力 近視 視聽

観 観客 観光 観戦 観測 観察 外観

などがあり、それぞれの違いが感じられる。「見聞」と「視聴」の違いも興味深い。ただし、「見学」の場合は「受動的」とは言い難い。

また、生理機能としての感覚・その力を表すには「視」が使われることがわかる。

「みる」ことを表す漢字は、その意味の広がりから「みつける」「みなす」「考える」などの意味を表す熟語にも使われ、重要な一群の語となる。

「見」には「見つける」の意を表す「発見」,「考える」意の「意見」,「会う」意の「会見」などもある。「視」にも「考える・見なす」意の「重視・敵視」などがある。「観」には、「客観・主観」という哲学的な意味まで表す語がある。

他の字と組み合わせさせた次のような熟語の違いも興味深い。

視点・観点　視察・観察・監察

「視力」に関しては、「眼力・目力(めぢから)」という語もある。

その外の「みる」ことを関わる漢字では、「監」は「見張る」意を表し、厳しさを感じさせる語を形作る。「看」も、「看守」だけは「見張る」意と考えられる。同じ「守」との組み合わせでも「見守る」とは大きく違う。人を表すという点でも「看護・看病」などでの使われ方とは違っている。

「覧」は、「広く、一通りみる」意に使われる。「鑑」は、「見分ける・見極める」意を表し、判断に関わる。「観賞・鑑賞」の違いである。

### 3-3 「運・輸・搬・送」など

次に、読みは違うが、ものの移動を表すという共通の意味を持つ漢字をとりあげる。

「運」「送」はそれぞれ「運ぶ」「送る」という訓読みを持ち、独立した単語を表すために使われ、また、組み合わせあって「運送」という単語を形作る。一方、「輸」「搬」は独立した単語としては使われず、造語要素となる機能だけで使われる。この四字の組み合わせで次の語があり、かなり近い意味を表す。

運送 運輸 運搬 輸送 搬送

「運輸」以外の語は「-する」の形の動詞となる。

ここで、造語要素としての順番が決まっていることが注目される。

運 - 輸・搬 - 送

「送」が最後に位置するのは、「送る」という動詞が「目的地に着く」ことを「運ぶ」よりも強く意味していることによるのだろう<sup>7)</sup>。

「運」よりも前に他の動詞が来るものとして、「通運」という語がある。「通」自体はものの移動を表す字ではない。

「搬」と「輸」は、「入」「出」と組み合わせあって、「搬入」「搬出」：「輸入」「輸出」という語を形作る。前者は建物などの内外へ「運ぶ」ことだが、後者は国の内外への移動、つまり貿易を表す。

より一般的な語構成要素と考えられる「運」は「\*運入」「\*運出」などの語を作らない。ただし、複合動詞の形で「運び込む」「運び出す」という形になる。つまり、次のような漢語サ変動詞と複合動詞の対応となる。

搬入：運び込む      搬出：運び出す



多くの国語辞典がこの対応を前者の語釈としている。

#### 岩波国語辞典

搬入 (展示物・家財道具・製品などを) 運び入れること

搬出 (展示物・家財道具・製品などを) 運び出すこと

#### 三省堂国語辞典

搬入 [文][倉庫や会場に] はこびいれること。

搬出 [文][倉庫や会場から] はこび出すこと。

#### 新明解国語辞典

搬入 [重い(かさばる)物を] 運び込むこと。「絵画の-」

搬出 [重い(かさばる)物を] 運び出すこと。

#### 集英社国語辞典

搬入 運び込むこと。「展覧会場に作品を-する」

搬出 運び出すこと。「展示品の-」

「はこびいれる：はこびこむ」の違いはあるが、国語辞典の編集者たちは、この漢語サ変動詞と複合動詞の対応をごく自然なものにとらえているようである。これらの語の体系を考える際には、複合動詞との役割分担を考慮する必要がある。

### 3-4 「学校」と「会社」

ある漢字がある語を「代表する」場合について見る。

「学校」は「学ぶ所」だが、現代では「校」の意味は意識されない。むしろ、「校」は別の熟語の中で「学校」を表す。

校 校内 校歌 校長 校庭 母校 私立校 共学校

また、「学校」の「学」も「学校」を代表することがある。

学 入学 退学 通学 休学 共学 私学

しかし、「学」は「大学」を代表することもある。

学 学長 学卒

「校長」と「学長」が対立する。また、「本学」は大学に、「本校」はそれ以外に使われる<sup>8)</sup>。

もう一つ、微妙な「学」と「校」の違いがある。「退学」は「学校をやめ(させられ)ること」で、「退校」は「学校をやめ(させられ)ること」と「学校から家に帰ること」のどちらも表す。そこで、「退校」よりも「退学」が一般に使われ、「家に帰ること」は「下校」が使われる<sup>9)</sup>。

次に、同じ二つの漢字から作られた語で、その一字が語を代表するものと、そうでないものを見る。「会社」と「社会」である。どちらも明治期に西洋語の翻訳語として新しく作られた語である。

「会社」は同じような意味を表す「会」と「社」からなり、「社」で代表される<sup>10)</sup>。

社 社内 社長 本社 支社 弊社 社宅

「社会」は「会社」と同じ構成要素「社」「会」を持ち、その順番が違うだけの語であるが、こちらは、その要素で代表されることがない。「近代社会」「情報社会」など<sup>11)</sup>。

### 3-5 「官民」と「公私」

類義の字だけでなく、反対の意味を持つ字が絡む組み合わせを見る。

上に述べた「学校」のところで「私学」という語を例に出したが、その反義語は「官学」である。しかし、現在ではこの語はあまり使われない。

「官」という語の持つ意味合いが避けられるためだろうか。現在は「国立」または「公立」の学校と言う。

ここで「国」と「公」の使い分けが問題になる。「公立大学」は「国立大学」を含まない。しかし、言うまでもなく、「公道：私道」「公有：私有」など、「公」が「国」を含むのは一般的である。「公務員」は国家公務員と地方公務員の両方を指す。

また、「公」はより広く社会全体を指すことがある。「公害」は代表的な例であり、「国益」と「公益」は違うものだろう。

一方、「公営」に対するのは「私営」よりもむしろ「民営」だろう。「民営化」は「私営化」とは言わない。

特殊な例として、法律の名称がある。「私法」は「民法」「商法」などを含んで、「公法」と対立する。そして、「国法」は「私法」「公法」の上位概念になる。

「官」は使いにくくなったと上では述べたが、「官庁」「官報」「官僚」「事務官」などの語では使われる。そして、「官公庁」では「官」が「公」と対立して「国」を意味する。

このような類義－対義の漢字とその熟語は、お互いに関係づけながらまとめて解説したほうがそれぞれの対立関係が見通しやすくなる。

### 3-6 「寒暑」と「冷暖」

反対の意味を持つ字の組み合わせをもう一組見る。「寒暑：冷暖」のほかに「寒暖」という組み合わせもあるが、「冷暑」とは言わない。「冷温」

という語があるが、「冷」と「温」というよりも「冷たい温度」つまり「低温」の意味で多く使われるのではないか。また、「寒冷」はあるが、「暑暖」とは言わず、「温暖」という語がある。

このような組み合わせの可否は、まとめて記述しておく、学習者に便利である。

それぞれが形作る語の例を挙げる。

寒：暑	寒気：暑気	嚴寒：猛暑		
寒：暖	寒流：暖流	寒色：暖色	寒暖計	
寒：温	寒帯：温带			
寒：熱	寒波：熱波			
冷：暖	冷房：暖房	冷氣：暖気	冷夏：暖冬	
冷：温	冷水：温水	冷血：温血		
冷：熱	冷血：熱血			

これらは、漢和辞典・国語辞典では、それぞればらばらに記述されるか、あるいは対となる語に互いの参照指示がつけられる程度のことが多い。まとめておけば、全体が見通せる。類語辞典では、ある程度まとめてあるが、字の対立関係がはっきり示されるわけではない。「語」のレベルより一段下がった「字」のレベルでの見通しを立てられるような形で記述されることが望ましい。

#### 4. 今後の課題

以上、いくつかの例を挙げて漢字の用法、特に造語要素としての側面を記述するには、意味による分類を施して類義・対義の字をまとめて記述することが有効であることを見てきた。

本稿の目的である漢字の意味分類によるリストを、注・参考文献表の後に掲げるが、作業用の試験的なものである。特に、抽象概念を表すものの分類は、不十分なものに終わった。

また、漢字の範囲はとりあえず常用漢字としたが、漢字・熟語の対立関係を調査するには、いろいろと問題がある。いくらかの増減を考えたが、対象の限定が難しく、今回は見送った。

多義・多用法の字についての検討が非常に不十分である。それぞれの字の造語力の調査と共に精密なものにする必要がある。

今後は、本稿を出発点として、漢字の用法の全体的な記述を目指していきたい。

#### 注

- 1) 林四郎(1987,1995)は漢字の機能の分析を精力的に行っている。本稿の基本的考え方は林と重なるところが多い。しかし、林は漢字を意味によって分類するという観点からの分析はしていない。
- 2) 「艇・舶」に「ふね」という訓読みを示しているのは、『三省堂常用漢字辞典』である。他の漢和辞典などでは「ふね」という訓読みはない。常用漢字表でその読みを認めないことに従っているためと思われる。  
「槽」は、国語辞典の「ふね」の項に、「ふねに形の似たいれもの」という用法の所に「「槽」とも書く」という表記の注意書きがある。
- 3) 「槽」は「ふね」の中でも意味分野が違ふと考え、除いた。
- 4) ただし、「船腹」に対応する「艦腹」は、辞典(『広辞苑』『日本国語大辞典』など)にはない。「潜水艦の艦首と船腹から浸水し……」という表現になるのだろうか。
- 5) 『明鏡国語辞典』には、「商法上では、商行為を目的として水上を航行する船で、槽艦船以外のもの。」という解説がある。
- 6) 訓読みの「送りがな」はその漢字の読みの一部と見なす。
- 7) 『明鏡国語辞典』は「送る」の意味を「物や情報が先方に届くようにする」としている。「運ぶ」は「ある所から他の所へ人や物を動かし移す」となっている。

- 8) 「本校」は「分校」と対立して「主となる」という意を表す場合がある。『例解新国語辞典』によれば、アクセント型が違う。  
 なお、「学長」ではなく、「総長」「塾長」などと呼ぶ大学もある。
- 9) 「退社」にも同様の両義性がある。
- 10) むろん、「社」はもともと「やしろ」であり、「神社」は「神のやしろ」である。そして「社」は「神社」を表し、「社殿」「社務所」などのことばがある。しかし、「会社」の「社」は単に「人の集まり」であり、会社を代表して使われることが多い。
- 11) 「会社」と「社会」という語が歴史的にどのような過程を経ているかについては、  
 齋藤毅『明治のことば』講談社学術文庫（2005年）  
 に述べられている。また、  
 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書（1982年）  
 には「社会」がとりあげられている。

#### 参考文献

- 林四郎（1987）『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院  
 林四郎・松岡榮志（1995）『日本の漢字・中国の漢字』三省堂  
 沖森卓也・三省堂編修所編（2013）『三省堂常用漢字辞典』三省堂  
 『岩波国語辞典 第七版新版』  
 『三省堂国語辞典 第六版』  
 『集英社国語辞典 第二版』  
 『新明解国語辞典 第七版』  
 『明鏡国語辞典 第二版』  
 『例解新国語辞典 第八版』  
 齋藤毅『明治のことば』講談社学術文庫（2005年）  
 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書（1982年）

#### [漢字の意味による分類表]

- 常用漢字を意味によって分類する。  
 名詞としての用法を持つもの、動詞としての用法を持つものが多い。  
 形容詞としての用法を持つものがそれらに続く。  
 複数の用法を持つものは、代表的な用法だけをとったものが多いが、二か所以上にのせたものもある。  
 もう一つの大きなグループは、単独では語にならず、語構成要素となるもの

である。こちらも、動詞的・名詞的、あるいは形容詞的な意味を持つ。それらを、それぞれ類義の語と並べて示した。

語か語構成要素かの判定は、現代の日常語で語として使えるかどうかを基準にした。漢文調の表現でのみ語となるものは、ここでは語としなかった。

語構成要素には（ ）をつけた。

動詞・名詞などの送り仮名は基本的に省略するが、紛らわしいものには区別のためつけた。カタカナで読みをつけたものもある。

## ◇名詞

〔時空〕

時 年 月 日 週 月 火 水 木 金 土 (曜 旬ジュン)

春 夏 秋 冬 盆 暮れ 歳 (季 午 旦)

朝 昼 晩 夜 夕 暁 宵 今 昔 暦 (歴 紀 昭)

間マ 暇 旬シュン

頃 折 際 順 先 前後 次元 (期 序)

所 場

東 西 南 北

〔自然現象・自然物〕

光 影 陰 闇

色 彩 黒 白 赤 朱 青 紺 藍 緑 黄 紫 紅 茶 (丹) 艶

音 響 匂 臭 香 味

物 液 粉 (気)

金 銀 銅 鉄 鋼 鉛 酸 (晶 璧 珠 瑠 璃 硫)

石 岩 砂 土 泥 塊 炭 油 灰 煙

水 湯 水 滴 露 霜

雨 雪 雲 霧 風 嵐 雷 晴 曇 虹 (候)

火 炎 熱 (電)

空 天 日 月 星 宙 世 (陽 宇 界 圏 気)

地 山 峰 崖 麓 丘 岡 峠 谷 沢 坂

野 原 洞 室 穴

(景 洋 岳 脈 峽 溪 窟 坑 墳 崎 礁 沙 壤 牧)

川 河 流れ 滝 泉 池 沼 湖 源 (洪)

海 湾 江 浜 浦 津 州 潟 瀬 沖 潮 波 渦 泡 (浪)

陸 島 岬 岸

林 森 木 株 幹 枝 節 葉 (樹)

草 花 華 芽 苗 根 莖  
 實 種 房 穗 (果 穀)  
 松 竹 杉 柳 桜 梅 桃 梨 柿 菊 藤 綿 麻 桑  
 米 麥 豆 芋 稻 茶 菜 芝 葛 茨 藻 蜜 汁  
 人 女 男 雌 雄 性  
 獸 猿 虎 熊 牛 馬 駒 豚 鹿 羊 犬 貓 象 蛇 竜 (畜)  
 鳥 鶴 鷄 魚 鯨 貝 龜 虫 蜂 蚊 蚩 蚕 繭 菌  
 生 死 命 魂 息 脈 熱 傷 病  
 身 體 裸 頭 首 顎 喉 顏 頰 面 額 角 牙 (咽 貌)  
 目 瞳 眼 鼻 耳 口 唇 舌 (盲 孔)  
 筋 髓 膜 (腺 胆 脊 椎 痕 瘍 痘)  
 背 肩 胸 膈 脇 腹 腰 尻 尾  
 手 足 脚 股 膝 腕 肘 指 拳 翼 羽 (掌 肢)  
 肉 骨 腦 心 肺 胃 腸 肝 懷 (腎 臟 骸)  
 皮 肌 毛 髮 眉 (膚)  
 菌 爪 血 脂 乳 淚 汗 唾 便 尿 卵 殼  
 (胞 胎 妊 娠 疫 症 痢 餓)

私 我 僕 俺 己 朕 君 彼 誰 者 方  
 親 子 孫 父 母 夫 妻 婆 童  
 娘 兄 弟 姊 妹 嫁 婿  
 (兒 孃 婦 伯 叔 族 戚 姻 祖 嗣 侶)  
 神 仏 鬼 魔 靈 幻  
 敵 友 主 客 他 皆 (徒 郎 輩 紳 賓 僚 漢)  
 王 君 殿 臣 后 妃 姬 兵 侍 士 民 (使 員 衆)  
 (聖 皇 帝 陛 爵 侯 將 帥 宰 尉 衛 曹 霸)  
 師 長 (元 副)  
 僧 尼 坊 賊 (仙 匠 翁 伎 儒) (奴 隸 囚 虜)  
 姓 名 氏 籍

國 都 道 府 県 市 町 村 郡 区 州 省 藩 (邦 京)  
 和 洋 英 米 仏 獨 露 唐 漢 元 清 (歐 韓)  
 田 畑 畝 里 街 境 (涯 域 圈)  
 道 通 橋 堤 港 駅 (路 途 軌 徑 畔 郊 鄉)  
 寺 宮 社 宿 塾 署 園 院 (舍 鉢)



公 官 省 庁 部 局 課 係 掛 位 役 (吏 科)  
 軍 隊 閥 団 群 班 組 党 派 会 宴 (級)  
 政 税 金 錢 財 富 (郵)  
 (租 貨 幣 賃 料 債 資 酬 賄 賂)  
 [人工物]  
 家 庭 門 扉 戸 堀 溝 井 堀 垣 柵 関  
 (屋 館 邸 閣 亭 郭 殿 樓 莊 廷 利 舗 校)  
 宅 寮 店 城 壘 陣 獄 墓 陵 巢  
 倉 蔵 堂 壇 塔 塚 碑 像 棟  
 柱 床 畳 壁 窓 軒 瓦 階 段 (房 齋 室 庫 廊)  
 棚 棧 枿 額 席 炬 灯 薪 (呂)  
 品 具 (材)  
 机 卓 箱 台 器 皿 瓶 鏡 杯 井 箸 籠 棺  
 (椅 陶 磁 硝)  
 鉢 盆 筒 缶 釜 白 鍋 膳 升 蓋 栓 弁 窯 (槽 斗)  
 板 盤 棒 串 針 鎌  
 繩 網 芯 網 俵 袋 包み 荷 鎖 鍵 錠 (索)  
 傘 扇 枕  
 服 袖 襟 裾 帶 布 衣 機 (巾 帽 冠)  
 糸 絹 綿 紋 旗 幕 錦 (緒)  
 飯 糧 餌 麵 餅 塩 酒 酢 糖 酸 (菓 酵 耐 肪 酪)  
 球 鈴 鐘 玉 宝 藥 (劑)  
 輪 軸 靴 革 漆 (環)  
 刀 劍 刃 弓 矢 的 銃 矛 盾 (砲)  
 笛 鼓 管 弦 琴  
 車 船 舟 艦 帆 (械 汽 艇 舶 舷)  
  
 絵 画 書 筆 紙 墨 判 印 (符 帳 簿 璽)  
 本 稿 卷 章 節 版 欄 図 表 (典 冊 箋 誌 録 史)  
 辞 語 文 句 字 訓 音 (楷)  
 話 談 評 弁 説 案 議 論 勅 詔 銘 題 筋  
 詩 詞 韻 訳 便り 票 券 札 (俳 諧 報 訃 款)  
 歌 唄 謡 楽 譜 声  
 劇 踊り 芸 祭 碁 遊び 旅 (玩 棋)  
 職 任 農 漁 猟 (役 績)

◇抽象名詞

〔精神〕

善 惡 正 理 和 法 刑 罪 罰  
（規 則 憲 典 儀 俗 令 範 律 訓 權 威）  
意 知 信 礼 義 德 忠 孝 恩 縁 （御 仲）  
誠 仁 操 （衷 宗 倫 責）  
志 望 み 願 い 夢 念  
情 思 い 愛 恋 憎 し み 恨 み 怒 り 喜 び 悦  
楽 し み 悲 し み 憂 い 鬱 苦 苦 し み 欲 恥 誉 れ  
感 じ 痛 み 恐 れ 虞 祈 り 趣  
言 行 い 癖 学 能 才 勘 気  
謎 問 い 答

〔位置関係〕

上 下 右 左 前 後 中 外 内 間 隙 （央）  
面 側 表 裏  
基 核 要 端 先 末 奥 横 隣 脇 傍 ら （礎 緒）  
底 縁 周 り 隅 角 辺 方 陰  
縦 斜 逆 幅

〔抽象概念〕

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 壹 貳 參 拾  
百 千 万 億 兆 京 零 幾 何  
事 空 虚 元 （不 素）  
是 非 否 偽 真 仮 各  
福 厄 吉 凶 毒 害 邪 （祥）  
喪 忌 禪 （犠 牲）  
甲 乙 丙 丁  
形 型 式  
線 点 円 丸 弧 粒  
数 術 率 度 角 番 倍 （箇 号 第 衡）  
条 件 項 個 （該）  
程 故 由 旨 （拠）  
質 類 様 柄 層 束 （状 態 況 然 性 的 容 如 徴 雰）  
価 損 得 益 富 財 利 金 値 円 銭 賞 （俸）  
力 技 業 術 策 勢 い 功 （医 勲）  
格 姿 跡 役 （標 徴）

寿 代 列 奇 微 印 (齡 維 緯 系 枢 統)

(片 相 双 隻) (楷 昆 那 秩 彙 踪 呉)

◇接頭辞的

(旧 曾 每 未 昨) (某 総 諸) (准 準) (亜 庶)

◇助数詞

(個 枚 本 冊 部 人 匹 頭 羽 軒 棟 戸 校)

杯 皿 束 足 着 台 機 隻

回 周 位 次 代 番 度 倍

升 合 斤 尺 寸 間 坪

年 月 日 時 分 秒 夜 晚 割 分 厘)

◇動詞

[自然]

光 輝 映る 映える 射 染 彩

照 晴 曇

降 吹 噴 荒 積 降(霜が) 止

鳴る 鳴く 響 臭 匂 香

汚 濁 澄

暖 温 冷 凍

生きる 生まれる 産 (誕 活)

育つ 育む 培う 太 肥 瘦 飢 (哺)

生える 伸 茂 咲 散 実 熟 腐 枯 朽 萎

死亡 没 逝 衰 疲 老 (殉 弊)

病患 治 腫 酔 効

経過 明 暮 更

初 始 起 生じる 発 続

終 済 尽 廃れる 止 (卒 完 了 罷)

[移動]

入 出 移 流 漂 浮 沈 没 潜る 溺 (容 遷)

行 参 来 戻 帰 返 (往 還 循 派 遣)

通る 通う 赴 歩 走 駆 泳 飛 辞する (奔)

去 着 進 退 過 超 越 (逐 拂)

巡 経 寄 至 達 届 (航 到)

止 留 残 滞 遅 急 (駐 停 屯 頓)

上 下 揚 挙 昇 登 遡 (騰)

降 落 陷 渡 (墮 墜)

運 (搬 輸)

〔変化〕

成 改 定 正 治 直 繕 矯 (訂 復 療 癒 修 弥)

変 替 代 換 化 (迭 更 粧)

消 絶 減 点く 失 現 興 栄 (抹 彰)

隠 潜む (秘 蔽 匿)

増 殖 減 衰 薄 静 (繁 節 耗)

足 加 添 補 備 設 整 繼 結 富

積 重 盛 (複 累 隆 堆)

壊 崩 割 分 破 折 潰 碎 挫 倒 傾 (剖 区 岐 毀)

切 断 裁 絶 綻 刻 (伐)

曲 伸 延 縮 畳 膨 反 丸 (凹)

開 閉 締 絞 緩 (披)

放 離 付 掛 架 垂 (距 附)

混 交 紛 乱 狂

固 溶 解 (凝 融)

空 詰 塞 埋 隔 (梗 填 窒)

広 狭 高 低 深 (展 拡)

早 速 強 弱 静 鎮 和らぐ

満 充 貯 込 混 空 透

焼 焦 燃 沸 湧 (冶)

浸 漬 湿 潤 漏 乾 干る (滋 泌 汜 燥)

〔動き〕

動 揺 震 回 転 滑 粘 (旋)

当 触る 触れる 擦 接 絡 (衝)

向 仰 屈 伏 跳 翻 躍 駭 暴 (扇 爆 発)

集 並 乗 載 構 群 控 (羅 搭 騎)

逃 脱 免 追 迫 避 (逸)

〔人の動作〕

起 寢 座 立 伏 居 眠 覚 醒 瞬 (睡 挨 拶)

住 泊 宿 働 勤 務 就 休 憩 遊 戯 稼

〔対物〕

持 携 保 支 握 抱 担 (采 把 撰 帶)

取 採 執 置 据 掛 懸 掲 (媒 遵)

付貼 繼 除 外 剥 罨 覆 卷 (環)  
 探搜 (索 偵)  
 得獲 釣 刈 狩 摘 (穫 獵)  
 拾捨 蓄 (棄) 植 (栽 撤 汰)  
 押推 抑 圧 挾 (利 効 捻)  
 差挿 注 刺 射 突 貫 削  
 引抜 出 入 収 充 繰 (抽 排 拉)  
 結縛 束 解 飾 (括)  
 投打 踏 蹴 乘 振 (拍 揮)  
 着脱 装 履 敷 包 張 塗 搾 (戴)  
 防阻 守 (遮 警)  
 行營 致 施 果 遂 係  
 (為 処 措 遣 服 踐 勉 勞 徹) (拓 墾)  
 使扱 操 用 費 賭 損 得  
 冒犯 催  
 計測量  
 作造 創 組 建 築 (工 刊 製)  
 彫掘 耕 刻 鑄 釀 (塑) (擬 模 象 肖 準)  
 縫編 織 紡 撮 刷 (印 膳)  
 洗干 掃 拭 磨 研 鍛 練 (濯 鍊 摩)  
 燒煮 炊 蒸 熱 煎 酌  
 食飲 服す 浴 被 吸 吐 (喫)  
 歌踊 舞 演 彈 詠 奏する 映 写 吹  
 [対人]  
 応迎 会 遭 待 遣 (遇 謁 紹 派)  
 別 訪 伺  
 連伴 從 召 率 添 仕 嫁 繼 (陪 隨 服)  
 養導 教 治 征 制 戒 責 (論 啓 訓 糾)  
 慰褒 報 封 使用 飼  
 招誘 呼 募 勸 雇 採 (婚 協 涉 介)  
 救助 頼 求 薦 (護 援 擁 扶 警 委 嘱 佐 需)  
 請促 契 乞 訴 (徵 約 盟 睦 訟)  
 治統 (司 揮 領 督 轄)  
 謝敬 尊 畏 慕 憧 倣 怪 哀 慈 (崇 獎 憬)  
 戰爭 競 鬪 挑 (武)

攻襲狙擊討守妨 (批劾抵抗障)  
 追捕捉拔 (逐逮拘鋼勾拐)  
 勝負敗破屈 (克)  
 殺葬弔悼虐辱弄毆斬剥 (斥撲拷)  
 嘲侮侵迫脅拒欺 (蔑罵嚇喝詐)  
 取盜奪 (窃)  
 上与讓惠贈奉提送宛 (給獻賦頒)  
 受頂授賜渡配償 (遺)  
 貸借返預 (託)  
 壳買弘納貢供商卸 (購販賠質)  
 許禁認峻 (容赦贊肯諾准)

〔精神〕

思企考悟知究察解証 (想慮臆判識析)  
 志望願念勵學習努怠囫謀 (希惰稽)  
 言告申述語講著書記描讀 (釈陳叙抄)  
 話說唱佻示呈称省略 (遺宣喻)  
 祈詣拜誓呪信疑  
 迷惑選決 (魅扞)  
 誤偽 (錯)  
 覺忘省顧 (憶)  
 調比試數認 (檢吟查驗審詮閱較算枚)  
 問尋答諮 (質)  
 聞承例祝叫默 (喚)

〔感情〕

愛好恋嫌憎恨妬羨 (嫉怨)  
 喜樂悲苦惱煩愁憂 (慶賀娛享)  
 怒憤叱  
 笑泣嘆惜驚弱困沈奮誇窮 (憾臆)  
 焦慌悔懲恥恐怖 (慄)  
 欲飽耐堪諦慣忍挫洪 (貪慨)  
 慎謹甘懷 (謙遜丁寧摯慢傲)

〔感覺〕

感見診眺望臨 (視看觀覽鑑監)  
 聞聽  
 香薰 匂臭嗅渴

痛 味わう 覚  
 [存在・状態]  
 在 有 居 要 (須)  
 存 属 沿  
 合 併 分 違 異 似 秀 でる 劣 (斉)  
 含 足 欠 余 極まる 偏る (剩)  
 兼 限 占  
 对する 関する 及ぶ 因る (依)

◇形容詞

良 善 正 悪 確 (適 宜 嫡 実 可 弊)  
 尊 貴 偉 雅 淑 恭 懇 俗 淫 卑  
 (貞 篤 莊 禍 痴 野 蛮 妄)  
 美 麗 巧 賢 愚 醜 拙 鋭 敏 鈍 純 雑  
 (佳 特 英 哲 傑 俊 逸 儉 廉 漫 冗 稚 駄 凡 庸)  
 粹 妙 変 豊 貧 惨 (朴 裕 悠 沃)  
 快 幸 朗 楽 懐 健 勇 盛 (愉 歛 祉 康 旺)  
 苦 悲 寂 痛 怖 怪 妖 (惧)  
 好 嫌 欲 憎 悔 惜 恥 (恣 羞)  
 暇 忙 慌 遅 早 速 (徐 疾 迅)  
 穩 静 潔 爽 汚 眠 (泰 閑 淨)  
 激 厳 酷 険 優 緩 危 (凄 壯 烈 猛 苛 辣 肃)  
 甘 苦 辛 渋 酸 芳 臭  
 暑 温 暖 熱 寒 涼 冷 明 暗  
 (曖 瞭 冥 幽 曖 昧 玄 顕)  
 濃 淡 薄 鮮 黒 白 赤 青 (褐 斑)  
 新 古 若 幼 強 弱 軽 重 (剛 豪 頑 丈)  
 固 硬 堅 柔 軟 (緊 妥 寛)  
 難 易 高 安 (廉)  
 大 小 多 少 珍 僅 乏 無 亡  
 (巨 類 単 万 繁 簡 希 寡 寸 孤 獨)  
 高 低 遠 近 深 浅 広 狭 (漠 博 裕)  
 長 短 太 細 厚 薄 (織)  
 荒 粗 平 丸 (精 緻 疎 梗 凸)  
 詳 密 等 同 別 (均)

永 久

(恒 慢 汎 般)

◇副詞・接続詞

又 再 既 常 必 全 最 特 殊  
未 猶 予 暫 即 仮 更 敢  
専 自 共 互 普 遍  
(通 頓 勃 濫 累 甚 概 漸 偶 尚)  
且 但

◇連体詞的 唯 翌 約 (両)

◇格助詞相当 (以)

◇地名などに使われるもの  
(媛 埼 奈 阪 阜 畿)